新製本ラインで小部数ニーズに対応

―データ活用で熟練工の技能を承継

㈱明光社 川口工場

株式会社明光社（矢野剛社長）は今年6月，川口工場（埼玉県川口市）にコンピュータセッティング機能を備えた新製本ラインを導入した。生産効率向上により増加する小部数製本のニーズに応えるとともに，収集したセッティングデータの活用により熟練工の技術をデータ化し，技能承継の課題を解消する計画を立てている。

特徴ある4つの工場で柔軟な対応

明光社は1963年に創業し，現在，書籍を中心に出版・教育産業・同人誌市場の3つの事業部門で製本と印刷を行っている。創業者である父を継いだ矢野剛社長は，1996年に代表取締役に就任した。

東京都文京区白山にある本社工場のほか，埼玉県川口市内に3工場を有する。文京本社はプリプレス・オンデマンド印刷・製本および営業本部，川口工場はPUR製本や大部数の折り・製本，東領家工場（オンデマンドファクトリー）は小～中ロットの製本，本蓮工場はモノクロオフセット印刷（川口・東領家と連携し製本加工まで社内一貫対応）と，それぞれ特徴ある役割を担っている。

同社が目指しているのは「ファーストコールカンパニー」。様々なニーズに柔軟に対応し，高品質な製品を適正価格で供給できる体制を構築している。製本事業部では早くから機械化を進めてきた。特に，折り加工の業者が年々減少する業界にあって，折本工程の内製化を図り，継続的に強化している。

2000年に開設したBOOKWILL事業部はオンデマンドパブリッシングに特化し，出版市場での小部数印刷・製本で実績を築いてきた。

「10年先も元気な会社を目指す」と矢野社長

STARBOOKS事業部では同人誌市場に参入し，デジタル化と自社開発の生産管理・受注システムの活用を進めている。ペラ丁合製本などユニークな製本方式に加え，オフセット印刷機の導入や箔押工程の内製化など一貫体制の強化に取り組む。品質要求の厳しい同人誌市場で鍛えられた技術を応用して，新しい製品が派生するといった効果もある。

また，名刺，ポストカード，アイコンシール等の印刷・製本Web受注サービス「PRINTAIL」も展開している。これは，自社のPODの強みを活かし，将来的なB to C市場参入へのテストマーケティングの意味合いが強い。

明光社でも，2020年以降のコロナ禍の影響は大きく，苦労が続いた。とりわけ，コミュニケーションの厳しい規制により，同人誌関連の需要が落ち込んだ。ようやく2023年から需要が戻りつつある。

7月から稼働したホリゾンの新無線綴じライン

一方，近年力を入れてきた教育関連書籍や専門書は底堅く，拡大傾向にある。教育市場もデジタル教材の導入など変化が生まれているが，矢野社長はこの分野のデジタル化，IT化の動向を注視しながら，取込みを模索している。

「出版市場は全体としては縮小傾向にあるが，当社は紙の本の需要はまだまだ続くと考えている。成長していくためには，増えている小部数需要への対応がカギとなる。デジタル技術を活用した効率的な生産方法を構築することで，小部数に対応するための強化策を進めていく」と矢野社長は話す。

また，今後に向けて，「当社は10年先も元気な製本会社を目指しており，最近は新規顧客からの問合せも増えている。一方，製本業界では，特に小部数の製本を担ってきた小規模事業者の退出が進んでいる。当社がその受け皿となり，微力ながら出版文化を支えられればうれしい」と前向きに考えている。

そして今回，小部数対応への具体的な一歩を踏み出したのが，川口工場への新製本ラインの導入だった。

若い従業員のモチベーションが向上

川口市新郷工業団地内にある川口工場では，これまでミューラー・マルティニ製，コルブス製の2つの無線綴じ製本ラインが稼働してきた。このうち30年以上経過したコルブスを今年6月下旬にホリゾン機に入れ替えた。従来は1万部以上を想定した設備だったが，3,000部程度の部数に絞り込み，コンピュータセッティング機能を備えた，より効率の良い無線綴じ製本ラインに切り替えた。ホリゾン機の小回りの良さ，セット替え時間の短縮に期待する。

入替えは1年ほど前から計画し，導入にあたっては東京都の革新的事業展開設備投資支援事業に申請し，助成金を活用した。

矢野社長のもう一つの狙いは，技能承継の課題を克服すること。現在，明光社の従業員76人（パート・アルバイト含む）の平均年齢は35.5歳。コロナ前まで毎年5，6人の新卒採用を続け，年齢は確実に下がってきた。全従業員の3分の2は女性である。会社の継続性